

『ひがしどおり「郷土芸能」と「食」を楽しむ会』中止のお知らせ

3月下旬に開催を予定しておりました『ひがしどおり「郷土芸能」と「食」を楽しむ会』は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、本年の開催を中止することといたしました。

開催を楽しみにして下さっていた皆様には大変申し訳ございませんが、新型コロナウイルス感染症の収束状況を窺いながら次回2023年の開催を目指しますので、どうかご理解いただきますようお願いいたします。

【問合せ先】『ひがしどおり「郷土芸能」と「食」を楽しむ会』実行委員会 ☎ 0175-48-2081

「菅江真澄（すがえ ますみ）」

「今昔物語」

東通村を訪れた来遊者として今回紹介するのが江戸時代後期の旅行家「菅江真澄」です。三河国渥美郡（愛知県豊橋市）に生まれ、長野・新潟・山形・北海道を経て青森を訪れました。下北半島には寛政4年（1792）の秋から寛政7年（1795）の春まで滞在し田名部（むつ市）を拠点としながら下北各地を歩き回りました。

その後秋田で生涯を終えた菅江真澄は、訪れた地域の伝承や習俗を記録し、絵図を加えた日記を残しています。これらは江戸時代の生活を今に伝える貴重な資料となっています。

下北地域の日記の1つに『奥のてぶり』があり、田名部の正月行事を記録しています。寛政6年（1794）1月13日に目名から3年に1度の獅子舞が訪れた様子を記しています。熊野の御札を高々と掲げた山伏の一行が、笛や太鼓の囃子で門打ちする姿を記しています。また1月15日には田植え姿の女たちが田植え唄を歌う様子や、16日にも家々で田植え姿の女たちが多く見かけることを記しています。

これらの記録によって、東通村の民俗芸能が200年以上も前から下北地域に根付いていたことがわかります。これまで継承されてきた文化を、伝承団体と地域が一体となって、集落の「大切な宝」として守っていただきたいと願っています。



目名不動院“権現様”（獅子頭）



大利“門打ち”の様子



目名“田植え餅つき踊り”の様子



大利“田植え餅つき踊り”の様子